

「心地いい空間をつくるための建築家の選び方」

参加建築家…赤沼国勝(P.26)、今井 均(P.46)、篠原啓史(P.80)、田口知子(P.88)、畠 龍徳(P.112)、宮崎 豊(P.136)、連 武夫(P.138) (50音順敬称略)

家を建てようという時に、家というものをどう考えればいいのか？建築家に頼むメリットは何か？何を決め手に建築家を選べばいいのか？誰しもが思い悩むことです。では、建築家たちは、心地よい家をつくるためには何が大切だと考えているのでしょうか。座談会形式で話しあってもらう中で、できるだけ建築家の本音を聞いてみたいと思います。

CW●今日はお忙しい中をお集まりいただきありがとうございます。これから家を建てようという人にとって、大切なことは何なのかといったことを話しあっていただこうと思います。まず、自己紹介からお願いします。

今井 均●私はもう独立して22年位やっているのですが、最初はコルビュジエの研究で有名な佐々木宏さんの所に10年近くおりまして、住宅を中心に工場などのハードなものもやっていました。今はクリニック関係がかなり多いですね。個人のお医者さんの仕事で、住宅は一般の方から、来たものは拒まずという感じでやっています。私自身ができるだけ自由にやりたい

方ですから、スタッフは最初から結構居ます。

連 健夫●もともとゼネコンに10年ほど居まして、教育施設の設計をやっていたのですが、胃の手術がきっかけになりました。会社をやめてマンションを売り、イギリスのAAスクールという学校に行ったのです。最初は学生で、次いで教師として5年程過ごしまして、1996年に帰国し、渋谷で設計事務所をやっています。現在スタッフは3名で主に住宅をやっておりまして、最近は幼稚園や大学校舎など教育施設も少しずつやるようになってきた状況です。

宮崎 豊●私もゼネコンに10年くらいおりまして、竹中工務店の設計部なのですが、在社中にアメリカの

ハーバードの大学院に2年間留学しておりました。戻って来た後、しばらく仕事をしまして、1995年に独立しました。在社中にやった仕事というのは何でもありで、集合住宅から学校の講堂、体育館のようなものから、スーパー・マーケットもやればオフィスビルもたくさんやりましたし、あととあらゆる種類の仕事を経験しました。独立してからは住宅が中心になっています。時々、集まってこそ意味のある、お互いの力が合わさって発揮できるような大きな仕事の時は、他の事務所とコラボレーションするような形でいくつかやったことがあります。事務所は川崎市で田園都市線の鷺沼のマンションの一室ですが、サンショは小粒でもピリリと辛いような小さくてもいい仕事のできる事務所にしていきたいと考えております。

赤沼国勝●私はちょうど学生時代が早稲田の大学闘争、東大の闘争という時期で、建築の勉強を何もしないで別の多くのことを学び、RIAという事務所に入りました。その当時RIAは、住宅に関しては「新建築」や「モダンリビング」などという雑誌にほとんど毎月紹介されている時代の住宅設計を主導していたところでした。学生の頃から住宅づくりを目指していたものですから、創立者の山口文象という先生に教わりたくて9年位在籍しました。入所後は、大きな建物をやらないと経営的に成り立たないという時代になってきていて、どんどん住宅の仕事が減ってきました。実際、私が住宅を担当したというのは3つぐらいです。住宅

に関しては約30人の設計スタッフの中で、社内コンペをしたり、アイデアや知恵を出し合い、組織的なものの作り方でやっていました。そこで住宅の大なるところって何だということを学んできました。独立以降は、環境共生というテーマに対して建築家はきちんと姿勢を出して行かないといけないということで、デザインとか機能とかはきちんとこなして当たり前、その上でこれからの時代に向けて、建築家として何を問われているのかというテーマで木材の産直やイチゴ屋根ワークショップ、土壁塗ワークショップなどいろいろな活動をして次世代の住まいのあり方を模索しています。

畠 龍徳●私は早稲田の大学院にずいぶん長居をいたしました、ひょんなことから縁があって筑波大の大学院の方に関わりながらアトリエを開いたのですが、当時は街づくりとか都市計画の方に関わっていました。

その後、40歳になってから、デザインを専業にしようかなどと考えて、坂倉建築研究所の東京事務所に籍をおくことになったのです。坂倉建築研究所では住宅をやるチャンスがなく、実現しなかったものも多いのですが公共建築だとホテルの計画などを手がけていました。当初は4、5年くらいで独立させていただこうかなと思っていたのですが、仙台のミュージアムの仕事が終わってひまそな顔をしておりましたら、当時の所長であった阪田さんにやれといわれてやったのが浜松駅前の静岡文化芸術大学の指名コンペだったので。これが一位ということになりました。結局9年程おりまして、1999年に独立しました。翌年に文化庁の海外芸術家派遣の制度でニューヨークに行くことになりました。かねてからニューヨークには長期間滞在してみたいと思っていたのです。おかげでその年は並行して仕事をしないといけなくなって、お受けしていた仕事も翌年にずれこんでしまったりしたのですが、

実質的には4年くらい住宅を中心にお活動をしてきました。あと、家具のデザインにも興味を持っておりまして、JOYシリーズというコンパクトオフィスやSOHO向けの白い家具一式をデザインする機会があり、インターネットでの販売を計画しております。

篠原啓史●私は15年ほどアトリエ系の事務所に勤めておりました。二つの事務所なのですが、アトリエ系の事務所といいながら住宅の設計はほとんどなくて公共建築、特に劇場、

ホール関係のものが多くて東急文化村のオーチャッドホールとか、シーボックス型の音楽ホールとしては日本で一番最初だった洗足学園の前田ホールといった劇場建築をずっとやってきました。設計から監理までずっと現場に常駐するという形でやっていましたので、後でまとめたら15年間で自分が関わったものは7つか8つしかないという結果でした。その後、1996年に独立して、初めて住宅に思考錯誤しながら取り組んで、ようやく7年目に入ったところです。スタッフは私を含めて3名で、年間5、6件ずつじっくりと一つ一つ丁寧に仕事を進めて行きたいというスタンスで事務所をやっております。

田口知子●私は東京大学の建築学科を卒業しまして、長谷川逸子さんのアトリエに8年程いました。ちょうど長谷川さんがコンペに熱心だった時期で、その担当をしていましたので8年間、公共建築を数多く担当さ



篠原啓史氏 (P.80)



せてもらいました。1999年に独立しまして、初めて住宅を設計しました。最初は友達の住宅をつくったのですが、大きな建築をいっぱい手掛けた後に住宅をやるとすごくスケール感が狂うというか、かなり違う世界だなと思いました。でもある意味、建築主の方の顔が直接見えるという部分が明快で、建築主に喜んでいただく感じとか、実際に生活されているところを見て結果を反省できるといった面白さもあり、建築としては公共建築に劣らず面白い分野だと思っています。独立後、最初の仕事は公共の集会場でキャサリン・フィンドレイさんというイギリス人の建築家と共同で仕事をやりました。その時から興味のあることが、先ほど赤沼さんもおっしゃっていた環境共生という言葉です。その集会場の設計では、デザインと環境との関わりというのがどの程度まで可能なのかということを追求しました。ただ機能的、設備的な部分だけではなくて、形としても何か環境にマッチする形というのがあるのではないか、例えば、風が抜ける形とか、陽が夏冬でうまく調整できる形とか、そういうことをテーマに建築の形態をデザインすることができないかと思いました。住宅というのは一方で「生活」とか「住み手の個性」というものが入ってくるので、環境共生だけでは捉えられないところもあると思うのですが、いつも光や風のあり方については意識してつくっています。

プロセスを楽しむというゆとりが大切

CW●それでは、家というものをどのように考えていけばいいのかといったお話から進めていきたいと思います。

今井●極く一般的な話ですが、文化と文明という観点からいいますと、現在の住宅は文明の部分に圧倒的に比重が寄っているという感じがします。どういうことかというと、太陽熱の利用だとか、エコロジー的な設備など、いずれもマスコミなどの情報源から得た知識であって、自分のものになっているわけではないのですが、そちらのほうが入りやすいようで、そういうところから住宅を発想される方が多くなっているということです。しかし、文明的なものというのは10年も経てば極端に変ってしまいます。省エネルギーのためにこういうものをつけたらいいとか、最近では、国土交通省の打ち出した法改正の環境問題もそうだと思います

のです。あれだって、一番程度の低い物を基準にして、すべてがオーソライズされているわけです。そういうことって住宅を考える上では決していいことではないと思います。もちろん、きちんとした建物を作っているところも多いわけですが、一番悪い建物を基準にしてすべての建物に換気扇をつけないといけないというわけです。でもそういうことだけが一般的な建築主に伝わって、皆さんそういうところから発想してくることになるわけで、それは僕から見るとつまらないという気がします。そんなことよりもっとその人の固有の生活があるはずで、住宅というのは本来そこから発想するべきだと思うのです。

日本では、他のこともそうですが、程度の低いところを基準にすべてを決めていくわけで、そういうやり方は、非常につまらないと思います。もっと高い所に理想を求めていくべきだと思うのですが、そうなっていないですね。もちろん、すべてのことがそうでなくともいいし、悪いものは規制すべきなのですが、すべての建物は、国土交通省が免許を与える一級建築士が設計しているはずです。そこで一級建築士の技術に対して認定しているのにもかかわらず、そういうことに関係なく全員換気扇を付けなさいというわけでしょう。何でこんな基本的な問題を頭ごなしにやらされなきゃならないのかと思いますね。本来は、田口さんのお話にあった気持ちのいい風のデザインこそ大切なですよ。

畠●僕の場合、住宅を本格的にやり始めて4年程ですが、住み手が満足したという反応が直接返ってくる醍醐味というのは、公共建築とはすごく違うところだと思います。ちょっと特殊な例かもしれません、ある建築主の場合は、感動された時に電話がかかってきたり、メールが届いたりします。私は、住宅の設計は住み心地と美的調和を両立させることだと思っています。その意味では他の建築に比べ、住宅はある意味での倫理性を強く要求されます。逆に言えば、美的調和という点では、徹底的なものに結晶させるのが難しい、むしろしないのが必然なのですが、うまく条件がそろえば美的調和と住み心地を両立させるものができるということです。

これは一般化できないかもしれません、住宅に関しては男性より女性の方が生活にねぎした美学というものを持っている傾向が強くて、しかも実際に行動もされるという気がしています。さっきの話にもどりま

すと、その建築主も前面に出られた方は女性で、その方が竣工後、いろいろと感想をいわれたのです。リビングを「光の遊ぶ空間」にしようということで、光の扱いをちょっと工夫したデザインをしたのですが、最初にお電話を頂いた時に、どこか過去に心地よい感動をした時とイメージが重なるとおっしゃったのです。それは北極圏でオーロラを見た時の体験だと聞いた時には、僕の方がゾクッとしてしまいました。その後、もっと嬉しい言葉を二つ頂きました。建築主は大学にお勤めなのですが、仕事でちょっといやなことがあったりしても家に帰ってくると元気になるという言葉を聞いて、それは本当に嬉しいなと思いましたね。それで究極の言葉というのは、そのリビングにいながら僕と電話されている時に、「この空間は私にふさわしい」とつぶやかれたのです。その言葉を聞いた時には自分でいいことをしたのだなと思いました。その方の場合は建築の雑誌を見られていることはなかったのですが、過去に建築家の方とおつきあいがあって、いくつか提案をもらってはいたのですが、より徹底したものを見つけていたのです。年齢的にはリタイア前の方で残った人生を自分たちの望む空間でというお考えだったのです。そういうところにお金を投じようと思いついた行動をされるのはやはり女性かなと思ったんですけど、結局、建築主の方と対話していく中で、建築主の方も色々発見をして考え方は変わっていますね。同時に、こちらも色々分かってきて…変化していくということが僕はすごく重要なことだと思うのです。最近の若い人なんかは有名な建築家の事務所を訪ねて、場合によれば自邸も見せてもらうといった研究熱心な建築主も増えています。いま僕のところにもそういう方が一人来られています。その方は30代前半の方なのですが、住宅の事例研究という意味では、僕なんかよりも実際よく探索されている感じです。だけどその人の場合もちょっとお付き合いが長くなつて色々雑談をしていますと、言葉は良くないですが、僕のところが人生相談所みたいになってきて…。いろんなことをしゃべっているうちにこちらも、この人は何を望んでいるのかとか、その人の世界が分かってくるんですよ。だからやはりキーワードの一つは時間か

なと思いますね。現実には一生に何回も建てることが出来ないのが住宅だと思いますので、プロセスを楽しむという、そういうゆとりを持っていただきたいなとも思っています。

何のために家づくりをするのか

赤沼●結局、心地いい空間をどのように求めていくか、それをどうやって作りだしていくのかということだと思います。先程、環境共生といいましたが、これは物の世界だけ考えてしまうと、つまらないものになってしまいます。環境共生というのはこれからの時代にやらなくちゃいけない最低のことだというように考えるのです。その上で空間というものを、時間系で考えてみるのです。これを記憶のデザインといっています。建物と住む人はどこかで必ずつながっている部分があるということです。我々建築家がそこに住まいを作る人たちにそのような思い出作りを見つける手助けをするのです。これが一つです。

別の例では人間というのは動物だからやはり嘘のある材料やなじめないものの中にいる限り、心地よくないういうのがはっきりしています。ではどうするのか？ 例えば、国土交通省が問題にしているようなシックハウス対策の類いのものをその時だけ、いつまでも問題にしている限り、心地いい空間は見つかってこない。シックハウスにしないことは当たり前のことで、それをどういうように乗り越えて次のテーマに取り組んでいくのかということか、私たちの役割であると思います。例えば、もちろんそれを望んだ家族にはという前提付きですが、私たちは土壁を建築主の家族と一緒に塗ったりするのです。土壁を塗ることによって、自分の記憶をそこにどうやってはめ込んでいったり、あるいは思い入れをそこに作っていくことをしたりします。家づくりの結果だけを問題にするのではなくて、そのプロセスを大事にしようということですね。また私たちの事務所ではワークショップをよくやるのですが、犬も、小さな子供もお父さん、お母さん、おばあちゃんまで含めて皆さんでこれから作る家をどうしましょう、ということを皆で意見をケンケンガクガクし



SEA arch・赤沼国勝 (P.26)

てもなかなかまとまりません。でも皆さんが納得出来るような方法の一つというのがワークショップです。私たちは住まいのデザインゲームといっているのですけれども、そういう手法を使ってやっていくと魔法のようにかなりきちんとまとまって来るのです。できた結果も家族の全員が互いに見えてくるという形で納得できる、次の段階で皆さん手を下して家を自分で造っていく、つまり家づくりを楽しむというわけです。それが、最終的には記憶に残る本当に心地良い空間を作り上げることができる。そして結果としてみれば環境共生になっているというわけです。逆に最初から環境共生を求めていくと大方納得できない物になると思います。何か一面的な妙な物を作ってしまう。そうではなくて、何のために家づくりをするのか、それは家族作りをするためなのだという、一番おおもとの所で考えていったその結果が環境共生だったのだというのが、私たちが長年やって来た中での今のところの結論です。

篠原●1996年に独立した時は、全然仕事がなくて、まずホームページを作ったのです。その頃はまだホームページを作っている設計事務所がそんなに無くて、ヤフーで検索しても100程度しかなかったですね。その時に、光と風、それに健康ということをキーワードにして、ずっとやって来たわけです。でも、建築家がいうところの光と風のことを一般的な建築主の方はどう認識されているのかなと考えると、皆さんそれぞれ違うと思うのです。それから今おしゃられた気持ちいい空間というのもその感じられる方は、人それぞれ違うわけです。私も建築主と一緒に壁を塗ったことがあります、それを気持ちいいと感じられる方もいらっしゃれば、本職の左官が塗った1ミリの狂いもないまっすぐな壁みてスッキリしたり、落ちつきを感じる方もいらっしゃるわけです。だから僕らが説明する時に、これ気持ちいいでしょうというような一方的な話し方はできないですね。建築主が何を気持ちいいと感じるのか、中には建築的なボキャブラリーや僕らの手法に対して全く相容れない方もいらっしゃいます。逆にいえば、かつては相容れない方が多かったかなという気がしますね。でも、最近は、ホームページで自分なりの主張をしていくことによって、私はこういうことが気持ちいい、私はこういうものを望んでいるのだと建築主の方もだんだん明確になってきたような気はします。僕はかなり開放的な空間、光や風を取り入

れる空間を作ることが多いのですが、この間、珍しい方がおられて、次世代省エネ基準の家を考えているのですが、やってくれますかといわれました。私はやつたことはありませんと答えたのですが、その方がおっしゃるのは、開放的なものができるのであれば、逆に、光と風、その光も南側からの光というのはコントロールも大変だから南側はほとんど閉鎖してもいいのじゃないかというわけです。そして、次世代省エネ基準のグレードまで持っていくれば、エアコンで簡単に温度コントロールできるのじゃないか、その方が私は快適だと思うというすごく極端な例なのですがそういう方もおられます。その中で僕らはどういう提案をしていくのかというの、これから設計、環境共生も含めて、大事だと思います。僕も今、地熱のエネルギーを住宅の中に取り込んだらどういう風になるのかということに取り組んでいます。地熱を使いつつ環境共生的に環境エネルギーを使った住宅に取り組んでみたいという反面、それがいいか悪いか分かりませんが、最初に今井さんがいわれたように換気扇と同じような話として次世代省エネ基準みたいな話も平行して出てきています。それをどういう風に、僕らが考えていくのか、そして単に建築主に迎合するのではなく、そういったことを建築主とどういう風にコミュニケーションを取っていくのかというのが、これから住宅を作っていく上で重要なことなのかなって思います。

住宅は人間が形成されるベースである

宮崎●僕は一緒に作るということが一番適した言葉かなと思います。これは建築家だけが一方的に自分はこういう価値基準でこういうものを作っていますから、合った人だけ来てくださいということではなくて、やはり、今お話しにあったように、建築主も閉鎖的なものが欲しい人がいたり、そうではなくて開放的なものが欲しい人がいたり、人によってその価値観、それから何が欲しいのかというの全部異なるのですね。そこで対話が一方的に建築主から受けただけじゃなくて、対等な立場でこちらからも提案して話し合いのできる環境をお互いに持つというそれがまず一番のベースだと思います。それがあるかないかで、お互いの理解度、最後にできるものの満足度というのも大きく違ってくると思うので、その部分を大切にしたいと思っています。一緒に作るという、価値観を共有してちゃんとお

互いに確かめながら、こういうものを作りたいということを分かり合いながら作っていくということです。人間がその住宅にいる時間というのはとても長くて、子供であればその住宅に生まれてきてそこでだんだん成長していくという意味で、住宅は人間が形成されるベースになっていると思うのです。どういう空間で育ったか、どういう光を感じながら、どういう風を感じながら育ったかということは、その人間の感覚をはじめ、価値観なり、好みといったいろんなものに影響していると思います。住宅はそのベースであるということで、光が一日中、どんなふうに変化していくのか、どんな自然の動きを感じができるのか、それをやっぱり家中に少しずつ仕組んであげるということも必要だと思います。例えば閉鎖的な建物がいいという人に対しても、人間は完全に自然との関係を立ち切って生きることができないで、例えば、天空の動きの変化ですか、季節の変化を一瞬でもいいから感じさせてあげられるというような部分を僕は大事にしたいと思っています。そういう意味で関係性という言葉をいつも重視しています。もちろん中に住む人同士が、仲良くなるという人間の関係性をよくすることももちろん大事です。それから建築のものとしての、ディテールのものとのものとの関係性も大事。また、住宅は、住宅の中で閉ざして考えがちですが、集まれば街になるわけですから、街と一戸の住宅のそれぞれの関係性も大事という意味でいろんな関係性というキーワードが出てくると思うのです。それを軸として考えながら、中にいる人が元気で健康になって、いい人間関係になっていくこと、それから街にあってもその住宅ができたことで街の価値が高まるようなこと。そういう価値を作り上げていく、そういうことが住宅づくりでやるべき一番大事なことではないかと思っています。そういう意味で建築主と価値観を共有することを最初にちゃんと対話をして、モノローグじゃなくてダイアログをやっていくのだという姿勢を持って、一緒に作っていく。そうすることによって社会に対しても価値のある住宅ができればといつも考えながら進めています。

連●皆さんのお話を共通点があり、ちょっと安心した

という感じをもちました。昔の建築家というのは割合、一方通行的に自分の作品というか、芸術を作るのだというような意識があったのではないかと思うのです。そのあたりの誤解みたいなものが建築主の方にあって、敷居が高いように感じられていると思います。そうではなくて、建築主と一緒に作っていく、その手助けをするのがこれから新しいタイプの建築家だと思います。それにはそれぞれ建築家の特色があると思うのですが、それは結果的に出てくるものであって、ある意味、翻訳ができるような建築家がこれから大切になっていくと思うのですね。そういう面で建築主と意識を共有するというコミュニケーションの大切さ、さきほどワークショップという話もありましたが、私の場合はコミュニケーションのやり方として、コーラージュつまり切り張りみたいなもの、建築主に最初に



田口知子建築設計事務所
田口知子氏 (P.88)

「理想の家」というタイトルで自由に自分の好きな絵とか写真を雑誌から切って貼ってもらったり、スケッチをしてもらったりしています。これはとくに子供がすごく喜びます。子供は自分の理想の部屋というのをなかなか言葉で説明しにくいのですが、絵だとわりと簡単にできるのですね。そして、その絵をもとにして、いろいろコミュニケーションを取る中でデザインのヒントを得ながら設計していく。私はそういうやり方を

やっているのですが、建築家の皆さんそれぞれやり方は違うと思うのですね。つまりそのやり方がそれぞれの「建築家の個性」だと思います。ですからぜひ建築主に伝えたいのは、住宅を「買う」のではなくて住宅を「作る」のだ、あるいは一緒に参加しながら何か新しいものを生み出す。そして出来上がったものが結果として何か建築主にとってとても意味のある建築になる。ある意味1対1で対応し、癒され、そして元気になる建築になるのではないかと思います。だからちょっと安心しました。

田口●私は今のところ、30代から40代の方の予算が少し厳しいくらいの住宅を手がけることが多いですね。建築の単価って本当にピンからキリまであって、建築家の家は最低坪百万万とかいろいろなことがいわれているのですが、私はそういうふうにくくれるものではないと思っています。やはり家を作るというのとはど

ても大きなイベントですよね。人生の中で多分最大の買い物をしようとしているのであって、それを車や電化製品みたいにインスタントに買えると思うことは間違っていると思うのです。今の風潮として消費者志向というか、お店へ行ってお金を払えば、完璧なものが手に入るという意識がすごく浸透していると思うのですが、家だけはそういうものではないと。人生最大の買い物物であって日々の生活を幸せにするための大切な容れ物なのだからそれだけのエネルギーを投入して、自分なりの生活スタイルとか、幸せの中身というのをきっちり把握した上で作るべきだと思います。それは決してスピーディにできるものではなくて、先ほどもいったように時間をかけるという、畠さんがいわれたようなことが、すごく大事なキーワードだと思います。現代は早いほどいいという価値がまかり通っていて、生産性や経済性というものに逆行するものかも知れませんが、時間をかけて、じっくり熟成されてできてきたものというのが一番信頼できるものですし、そういう時間を持つということを決意してもらって、腰をすえて家づくりをするということが将来の幸せな生活を作るためにとても大事だと思うのです。建築家に頼むことの贅沢さというのも充分な資金がない時には躊躇する原因だと思うのですが、たとえ2,000万円といつても大きな買い物なのですから贅沢をしていいと思うのですよ。徹底的に自分の好きなもの、自分の幸せについてとことん話し合ってそれを実現してもらえばいいのです。そういう建築家を探すということが、家を作る時に一番大事なことだと思うのです。そういう風にして自分が手間ひまかけて作ったものというのは、愛着を持ってその後も世話をしていくだろうし、愛着を持って手入れをしたものというのはそういう味が出てくるのですね。それで、10年経った時に幸せな感じがする家、というもののが出来上がるのではないかと思うのです。暮らす人が幸せを感じられて、愛着を感じられなかったら、その家は廃墟になっていくと思います。そうではなくて、そこに入った時はゼロで、住みはじめてからじっくり育てて行くことによって味のある住まいになっていく、建築家はそういうものを作るお手伝いをしていかなければいけないと思うのです。

建築主と建築家のお互いが影響しあうことが大切

今井●お手伝いというのはまさにその通りだと思いませんね。建築家もいろんな人がいるから作家志向で自分の主張を住宅で表現されてもいいと思うのです。ただ、一般的な住宅の話という前提で考えると、我々は建築主の希望に対してどうやって具体性を与えるかということも我々の仕事なのだろうという風に一方では思っています。でもそこはやっぱり人間ですから、僕自身も出るわけですよ。建築主の意見も出るけど僕自身も出る、逆に出なければならないほど意味がないですね。ですから建築家を選ぶ時にもちろん空間のかっこよさや何かもあるのですが、その人が今まで作ってきたものがいくつかあると思うのですね。そういうものから建築主が何を感じるかということがすごく大事で、最近のビジュアル系の住宅だと白い螺旋階段があるとかがやたらと目についたりするわけですが、そういうことじゃなくて、隠し味的な部分が分かるようになる。これはプロじゃないとなかなか分からぬかもしれません、そういう口では言えない部分に感性を感じる。このことが一番大事な部分だと思うのです。それがきっと建築主の本質なのですよ。建築主は言葉ではなかなか表現しにくいかもしれません、誰かの作ったものを見ることによって、自分の感性とぴったり合ったりするのです。そうすると初めてそれが自分の内面的なものかもしれないと思うわけです。その内面的なものをさぐる作業って自分ではほとんど難しくて誰かに出してもらわないといけない。その部分が建築家のかなり大きな仕事であると僕は思っています。ですから先ほどからプロセスのお話がいくつか出ているのですが、プロセスは僕については、いつも満足する住宅よりも納得する住宅を作りましょうというようなことを多少遠回しにいっています。それはプロセスを知れば、結局100%満足する家なんてありっこないからです。家族だってみんな思惑が違うのです。ところがプロセスを自分たちが問うことによって、結果に対して自分が満足するというか納得することができるのです。それは最終的にできたものに対してこれでいいということになると思うのです。ところが満足する住宅というのは意外と、雑誌なんかを見て、これと同じものを作りたいということで出来たものもあると思うのです。それでは満足という言葉自体がその場限りの非常にかけらう的なもののような気がするのですよ。納得した住宅だからこそ、こだわってずっと住んでいける。で、こだわりというのが、そこに生

まれてくる。その部分がなければ、住宅を作ることは建築家には容易いというかそんなに難しくないわけです。その人のオリジナルをそこに出してくれるということが、非常に難しいと思うのですね。ですから、意外と一つの住宅が賞をとったとしても、そういうことが嫌いな人もたくさんいるわけです。ハウスメーカーは大きな企業がいくつかあるとすれば、建築家も無数にいる。建築家はハウスメーカーではないけれども無数のところから選ぶことができる。だから受け身でいかざるを得ないことは、ある程度仕方がないと思っています。その時にお手伝いという言葉があるのですが、その中でその人の感性を出してあげられるかどうか、その部分が建築家の大事な仕事かなと思っていました。ですから隠された部分っていうのを引き出す、または隠されたデザインが将来的にその建築主にも分かるということが大事ではないかと思います。

連●感性というのは建築主の方の感性ですか。

今井●そうそう建築主の感性が大事なのです。彼らの感性も大事ですが、結局は建築主の感性の影みたいなものなわけですよ。

連●そこが多分すごく重要なポイントですね。先程、畠さんがお話になられたことにも共感するのですが、建築主と建築家が変化していく、これは面白いですね。建築主から我々も影響を受けながら、ある意味で建築主の感性に刺激を受けながら、これは何だろうと考えつつ、それを具体的なデザインとして設計していく、結果的には建築主が設計している

ようなものですよ。その中でどういう風に具体的な自分のデザインの味を出すか、出すのではなくて自然に出来ばいいのです。そのような関係の時に面白いものが結果的に生まれると考えれば、相互作用があって楽しいですね。赤沼さんのワークショップも多分そうなのではないですか。

赤沼●有名な話ですが、ライトがウォーターフォール(落水柱)※1を作った時に建築主と岩に座って滝を眺めたと言われています。その岩はそのまま家中にあります、そこから一体何が聞こえてくるのか、何が見えるのか、あるいは寝室になるべきところから外に出たら、鳥の声が聞こえた。そこで鳥の声を聞きながら目覚め

たらとても気持ちいいねっていう話がそのままプランになった。でも、お互いにイメージしているところは違うのだと思います。ただ建築主にしても、その一言があったから、新しい空間がそこに生まれたと思うのです。おそらく建築主の方もとても貴重な感性を持っている、同時に建築家も貴重な感性を持っている。それがやり取りによって一体になった時に初めてこの世になかった創造的な空間が生まれると思うのですね。やはり、どちらが主導ということではなくて、そのへのやり取りをどういうようにやっていくかが大事なのだと思います。それを受ける、感じる力ですね、これがものすごく大事のだと思うのです。

畠●対話の中で変化していくという話、それと、関係性っていうのは本当に大きなキーワードだうう思いますね。例えばインテリア空間に限った場合でも日本は非常にモノが溢れている国です。

しかも贈答といった慣習もありますから、なんなく適当な価値のモノがそれこそガチャガチャと集積していて、どのお宅を訪ねてもモノが多くて、倉庫みたいになっていることが多いですね。僕はどのお宅もそういう感じですからと申し上げのですが、最初は恥ずかしいから裏側は見せないみたいなことをおっしゃる方が多いです。結局、いろいろな脈絡のないモノが、全体の関係性のないバラバラの状態でそこに並んで置かれているということなのですね。個物に焦点を当てると、それは歴史性があったり、所有者が愛着を感じていたり、確かに価値があるのですがね。ところが建築家と付き合いを始めて建築主の方が変わっていく。その中で一番大きいなと思うことは、全体として見た時に調和のある空間になっているかどうかということにだんだん気付いていくということだと僕は思いますね。それからもう一つ、例えばニューヨークのソーホーなんかに行くと、フラッグというのが出ています。これは偶然とは思えないのですが、前後にあるフラッグの色調が全部調和しているのですよ。そういうのを見ていると、これは平均的な話なので、当然そうでない人もいるわけですが、日本人は対人関係を含めて、他者に対するまなざしというかその辺の強度がちょっと曖昧というか弱いと思うのです。それでさっきのソーホーのフラッグの



MDS建築研究所
宮崎 豊氏 (P.136)

話にもどりますと、その企業のアイデンティティを表すデザインとか色というものをもちろん最初に考えると思うのですが、どうも向こうの人たちというのはフラッグを掲げた時に前後にどういうものがあるか、建物の壁面はどうかという、そういうことを考えないではいられない頭をしているのではないかという風に向こうに居た時に思いましたね。他者に対する関係性の意識みたいなものが実は街づくりというか、タウンスケープみたいなものを考える時にもやはり反映してくるように思います。そういう根本的な問題も絡んでいるのかなと僕は思っているのです。

宮崎●今の関係性のことについて建築主がだんだん気付いていくのはとても面白いと思いますよ。まさに僕もそれを実感、体験していました、最初にプランを書いたり、カラースキームを見せたりとかいろんなスケッチを書いたりしながらコミュニケーションを取って、つくっていくのです。ところが現場が始まるときには形ができるのを時々建築主に来ていますが、実際にこの段階でこうなっているのですなんていながら見てもらうわけですが、段階ごとに建築主の感じ方が全く変わっています。例えばスケール感一つにしても、コンクリートの基礎だけの時には「エッ、こんなに狭かったの」と驚かれるわけです。ところが最終の仕上げの段階になると「ちゃんと大きさだったのね」という風になってきます。同時に色の話でも、建築主が絶対こっちの方がいいといっていたのに対して、僕は多分こっちの方が調和すると思うのですがといながらやっていて、空間が出来上がって、本当に塗装屋さんが塗る直前になって、二つを並べてみるとやっぱりそっちが良かったわねということになるケースが非常に多いです。なかなか全体の関係性の中で物を見るというのは簡単なようでいてそうではない。非常に難しい作業ですね、それをやるには現場の出来上がった空間の中に建築主に立って頂いて、それで本当にこれで決めていいですねという作業をやれば、建築主がすぐ判断しやすくなると思うのです。そういう全体の関係性を先に予知できる能力みたいなものを建築家というのは持っているのではないかと思いますね。それは学生の時から建築を学んで、いろんな空間を海外を旅行したりして、見たり体験して、巨匠の作品を見て、これはすばらしい、こんな光や空間がこんなスケールでできるのだと、こんなに天井が低くても気持ちいい空間があるのだという様々

な経験が体の中に蓄積しているわけですね。だからこそ建築主にこっちの方ができた時に全体の関係性はどうもいいものになるといえると思うのです、でもそことのところを伝えることが一番難しいところで、そこをいかに建築主に分かってもらうか、そこが僕は一番大切なところなのかなと自分の経験から感じています。

自分に合わなければ断る勇気も必要

畠●それを支えているというのは、根底的にはやはり建築主が建築家を信頼しているかどうかということだと思います。だから信頼が成立するようなおつきあいというかそういうことができるような状況が大事だといえますね。一般的建築主の方というのは建築家に相談にいったら、もしかすると大変なことになっちゃうかも知れないと思っている人も多いわけですよ。そうではなくて、まずはお話をという雰囲気の中で、この人だったら任せて大丈夫ではないかという信頼感ができればいいと思うのです。具体的のものをクリエイトする時にはジャンプする部分が必ず出てくるわけです。三次元空間の場合、建築をデザインする當人であっても、実物ができ上ってみるとその力に驚くことも多いわけです。まして、素人の方が想像されるのには無理なこともあります。そこでその建築家を信頼して、じゃちょっとやってみようかみたいな、そういう基礎が作られているかどうかというところが非常に重要なと思いますね。

連●この信頼感がとても大事だと思います。信頼感があるからこそ議論ができるのですよ。もちろん、建築主と意見が食い違う時があるわけですが、建築家の役目には社会性が常にあります。建築主がまっ黄色の非常に派手な建物を作りたいといつても街並みとしてどうなのか、その場合はこういうふうな形がはじむのではないかとか対話の中で、専門家としての社会性、あるいはモラル、そしてもうひとつは形にする力、そのような視点で建築主とうまくキャッチボールができるような人、これがおそらく今後建築家に求められるのではないかと思いますね。それを一方的に上からこれがいいのだというのは、そろそろ止めてもらいたいと思うのです。建築家はそういう人じゃないよというふうに認識して欲しいですね。

CW●事実は違うのかもしれません、話に尾ひれがついてどんどん膨らんってしまったところもありますか

ら、建築家はということを聞いてくれないということが結構一般的になって、編集部にも自分たちの意見は聞いてもらえるのでしょうかと電話で聞いてくる人がいるくらいです。

建築家がつくるのは空気である

今井●でもね、建築家に頼んで大変なことになって、二度と建築家に頼まないという話も耳にしますから、そういう建築家もまだいるのですよ。建築家が好きなことをやってというのもあるでしょうが、技術的な部分で失敗して、雨漏りが止まらないとか、そういうようなこともたまにあると思います。ただ、建築家の捉え方として、むしろ好みやテイストが合わなければ断る勇気がいりますね。これはかなり大事なことで、この部分はお互いにしっかり持つべきですよ。それをやらないから結局、トラブルになるのです。やっぱりその建築家の持ち味、この人はこういう空気を作ってくれるのだっていうことを建築主は一番見なくちゃいけないと思います。技術的な裏付けというのは、建築家以外のエンジニアリングをやってくれる人が他にもたくさんスタッフとしているわけで、そういう人たちがフォローしてくれるので空気だけは建築家しか作れない。だから建築家にあなたのつくる空気を変えて欲しいといわれたら建築家は拒否すると思うのです。例えば雑誌を持ってきてこういう家を作ってくれませんかといわれた時に、自分と全く相反するような家を持ってこられたら、建築家も拒否する必要があると思います。それなら、この人に頼んだ方がいいですよというべきですね。そういうことは社会の通念としてしっかり植え付ける必要があるのでないかと思いますね。

古い話なのですが、僕が建築を始めた頃の住宅分野での巨匠の一人に東大の池辺陽さんという建築家がありました。当時、池辺さんの住宅を気に入つて頼んだ方の中には文化人といわれる人がたくさんいたのですが、VANの社長をやっておられた服飾デザイナーの石津謙介さんもその一人です。四谷にあった住宅^{※2}は、内外ともにコンクリート打ち放しだったのですが、

竣工後、当時はまだ珍しかったオーディオを入れたところ、内外打ち放しなものだから、オーディオをかけるとすごくライブな感覚になって、まったく不明瞭な音しか聞こえなかったそうです。RCのラーメン構造なのですが、壁が薄いので冬は結露がひどくて壁を滲のように水が落ちていったそうです。おまけにキャンティレバー自体が薄い階段状で、中には折れてしまったといった話を聞いたことがあります。写真で見ると4、5cm位しかないからきっと鉄筋がうまく入らなかつたでしょうね。池辺さんにすれば、なかなかロマンチックな家という風に思いましたが、あの頃アメリカを真似てケーススタディハウスとしてやられたものの1つでした。それでも石津さんはこの家はいい家だといっているのですが、そこだと思うのですよ。結局、自分がこの建築家を選んで正解だったのかどうかというのは、最後の方の空気しかないとと思うのです。要するに文明が進めばテクノロジーの価値なんてなくなっていくわけです。以前僕は平行定規がかなりいい道具だと思っていたのですが、コンピュータ時代になったら誰も使わなくなってしまいました。そういうふうに文明というのは、新しいものが出てきたらどんどん変わっていくわけです。だけど人間の感性というものはそんなに変わらないですよ。例えば日本人がヨーロッパに留学したからってヨーロッパ人になって帰ってくるかといえば、逆にもっと日本のことが大事になつたって人が多いわけです。この一番根っここの部分を発見することが大事なのです。ただ結構難しいことなのです。だから先ほどから時間がかかるという話もあるし、時間をかけばいいって物でもないのですが、やはり今までその人が建築家として作ってきた仕事を見て欲しいと僕は思いますね。それが最初の出会いとして大切です。建築主が建築家をどうやって見つけるかというと、やはりその人の作品を通してその人の感性というか空気みたいなを感じる。その空気の中に住むのだと。

畠●今の今井さんのお話についてですが、空気というのは僕も最終的には非常に重要なことだと思います。さっき住宅の住み心地と美的調和のことをお話しましたが、空気というのはどちらかというと美的調和の方



株 OPS建築設計研究所
畠 龍徳氏 (P.112)

に属しているような感じがしますね。僕としては美的調和というのは、文化の違いとか、年令とか、性別とか、そういうものを超えて、やはり普遍の力を持つデザインを目指したいと思うわけです。だけど、住み心地というのは、人によっては利便性にすごく執着する人もいれば、一方で私の家具の試作品第一号を買われた人というのは、20代の中頃のプログラマーの方ですが、その方なんかは、ブランド物の洋服なんかを揃えて、それを卒業して今度はインテリアだといっているぐらいで、その人はもし自分が住宅を作るとしたらデザイン性8割ぐらいで考えますが、それでいいでしょうかといわれたので、それは大変結構なことですといったのです。それはその人の価値観なわけです。年齢や男性・女性の性差なども関係するかもしれません、やはりキッチンの使い勝手がどうこうといったことに執着される方もいらっしゃるわけです。だから空気というのはどちらかいうと美的調和、普遍性に属する言葉だと思います。一方、住み心地となるとやはり個別性ですね。その人の歴史性などに依存するところが大きいですから、それは対話の中で探っていく以外に手はないという感じがしますね。

連●ある意味で建築主に建築家に対する誤った誤解をなくしてもらいたいと思います。それに、建築家が自分に合わなければ断る勇気も必要だと思います。どういう風に断ればいいのかということと同時に、どういう建築家に対しては断った方がいいのかという話もあると思うのです。一つあるのはその建築家に文化を作っている意識があるのかどうかということです。よく建築家と一級建築士の違いは何なのかと聞かれますが、建築家は「ノー」といえる人のだと考えています。自分の糧のために仕事をするのではなくて文化を



作っているという意識があるから、やってはダメな場合は仕事をやらない、そういうことを言える建築家かどうかというのを見て欲しいと思いますね。じゃあ、文化をつくっているとはどういう意味なのかという話になると思うのですが、それは自分のやっていることが歴史の中に位置付けられるかどうか、そういったことを建築家が考えているかどうかですね。ある意味古いタイプの建築家、僕はそういう言い方をよくするのですが、合理主義とか、空間主義とか、そういうことは昔の話ではないかと思います。今はむしろ個別性みたいな話が大切で、美についても個人によって全然違うのではないかと考えられるようなこと、そのあたりの読みとりができるかどうかが多分非常に重要なのではないかと思います。時代はどんどん変わっていくわけで、戻るわけにはいかないわけです。ある一つの視点では美しいと思っていても違うところから見たらそれは街づくりにとってよくない。あるいはバランスがよくないといった、いろんな価値判断が出てきます。それを読み取れるかどうかというのがおそらくこれらの建築家なのだと思います。そうではない建築家だったら断られた方がいいと思います。

今井●僕は文化を作るというより、文化を生むものが住宅だと思っています。文化というのは例えば大きな公共建築で、ここに文化センターがありますみたいなことではなく、一般の人たちが毎日の生活を通して育まれていくもので、たまに文化会館みたいなところへ行って文化がどうのこうのっていうのは全然違うと思うのです。人間が生まれて死んでいくまでに、一番多くの部分で影響を受けるとしたら、やはり住宅だと思います。とくに三つ子の魂百までなんてことわざがある位ですから、小さい頃に相当育まれるはずです。文化的かどうかということではなくて、住宅で文化を育てるわけです。そのために住宅はやはり自然体であるべきだと思うのです。だから僕はさっさと換気扇でコントロールするような家をつくってしまったら、それはオフィスと同じではないかと思うわけです。オギヤーと生まれた子供は、自然界に生まれたのではないわけです。やはり、木は木、鉄は鉄であるべきというような、自然の原則的なことを学ぶ場所であるべきです。そこで学ばせるものは親が教えるとかではないのです。住宅の中だと、住宅の周辺で学んでくるわけです。そこがすごく大事なのに建築家やハウスメーカーーやまたは国土交通省あたりが、自分たちのやり

方でこうだと押し付けてしまう。僕はある意味で一種の罪だと思いますね。やはり大事なのは、建築家の吉村順三さんの有名な言葉ですが「人間は自然の一部だ」ということだと思います。最初に生まれた時にそういう環境をつくってあげるというようにしないとね。文化センターに行って文化を学ぶのではないのです。だから大きな建物を見て、すごいねとはいはけれど、そこから本当に文化的なものを学んでいるのではないでしょう。やはり住宅の中、今や核家族どころか孤児なんて子供が一人でご飯を食べる時代になってしまったわけですが、これは仕方がないとしても、本来の住宅を考える根底にあるのがそこでなければ、住宅は名ばかりでファッショントイみたいなものになってしまいます。やはり住宅の本当のところはオギヤーと生まれた時にそこに自然があると、親がいて自然な状況があるということを我々は絶対に外してはいけないと思うのです。

連●よく古いものを改修しながら使っていくという話がありますでしょう。それで面白いのは、ヨーロッパではよく見かけるのですが、昔の住宅を学校や病院として使っているのです。住宅自身が様々な使われ方をしているのです。つまり、それは住宅自身が様々なものを統合するような創造する場なのだともいえますね。ある時期から建物種別になってしまって住宅は住宅というカテゴリに分けられたのですが、もともとはすべてのものは住宅から始まっているという捉え方ができると思います。

篠原●すぐ参考になるお話をですが、一般の方が読んだ時、難しそうなことばっかりいって、建築家ってやはりこうなのってことになりませんかね。

畠●確かに文化というと、ちょっと難しく感じてしまいますね。住み手が元気になる、いきいきとするような住宅を作るということをいい、と思います。

自分の感性や好みを知ることも大切

赤沼●かつて家は、陽道とか風道とか風通しを考えて建てられたものですが、今だからこそこういった昔からの住まいの方の知恵が必要なのではないかと思っています。ですから建築家が建てる場合も敷地と相談する

ということは非常に重要なことです。隣に家が建てば、採光や通風はどうなるのかといったことを動物的感覚で捉え、次にそれを科学的目できちんと取り入れていく。太陽の動き、受容できる日射量、そのデータを使ったシミュレーションなどハイテクな利用や部屋をソッと抜けてゆくそよ風の取り入れ方、やさしい木漏れ日や木陰の作り方、など昔から伝わるローテクの方法、その双方でその土地の持っているポテンシャルを最大限に活かすことを考えることはますます大切になってきます。安心して住める住宅をつくるためには、機械力にばかり頼るのではなくて、その家族に合ったきちんとした方法を提案することです。建築主といろんなことを話し合っていく上で、この家族と、この土地のポテンシャルを生かすための住宅が浮かび上がってくのではないかと思います。

畠●一番大事なのは空気みたいなものですね。いい空間というのは、文化や街並みに自然にフィットする空間なのだろうと思います。自己完結的にデザインされるだけではなくて、周辺との関係性の中でデザインされることが大事ですね。

今井●街並みを歩いていると、目につきますが、いい住宅ってあるのですね。そういう時、住宅って街並みをよくしていく起爆剤みたいなものだと感じます。考えれば、多くの街

並みも設計者が意図してできたわけではなく、自然発生的にできてきたわけです。

田口●文化という言葉の捉え方だと思うのですが、生活者としての文化ということも大事なことだと思います。手がかりになるものとして、例えば、一点豪華主義というわけではないのですが、家具や食器など、はじめは一つでいいから本当に質の良いデザインのもの、しっかりした信頼できるものを買って欲しいと思います。そうやって自分の好みや感性といったものがつくられたり、自分の好みが分かってきたりすると思うのです。それに、環境共生といつても、馴染みのない人もまだまだいると思いますが、やはり自分の生活中で、例えば、鉢植えの花を一つ窓辺に置いてみると、窓から入ってくる風の気持ち良さを感じてみると、植物や太陽や生き物、自然ということに意識が向かっていって、皆が気持ちの



株創建築アトリエ・今井 均氏
(P.46)

良い環境を求めていくことが環境共生、さらに文化といったものに発展していく基盤になるのだと思います。

赤沼●三歳の子供にしても何で暖かいのかといえば、太陽が暖めてくれるということは分かっています。やはり自然とどう接するかが大切なのだと思います。それにこれからは、住宅の概念は変わっていくと思います。共働きの家族が増え、高齢化、少子化が進んでいます。生活が変われば、当然、家も変わっていきます。計画という意味でのデザインのあり方も変わらなければなりません。その家族に最適なソフトの発見とそれに見合ったハードづくりの工夫、新しい手法を考え出されなければいけないと思っています。これから時代、建築家にとっても、今知っている固定的な考え方だけでなく、ひょっとして別のやり方もあるのではないかという柔軟な考え方があります必要になってくるだろと思いません。

連●建築家が家をデザインするということは、設備や建材のカタログからアッセンブルすることではなくて、敷地の特性や住み手の生活を考える中で、0からつくりあげていくわけです。従って、北海道には北海道に合った住宅があり、九州にはその特性を活かした住宅になるはずで、どこに行っても同じ形というのもおかしい状況だと思います。

宮崎●やはり建築主の家族の生活に対する思いや暮らし方ということが大前提になってきますね。

篠原●だから、一軒ずつ全く異なるわけで、同じ家は一つとしてないわけですよ。

連●それを見つけていくわけですから、建築主にとってもそれなりに時間は必要ですよ。

今井●でもそれはムダな時間ではないと思いますよ。だって一生に一度のチャンスなのです。家を建てるということは、それこそ指揮系統のトップになれるわけです。すべての判断が自分でできるのです。しかも、職人の仕事を始め、建築のすべてのプロセスを見るともできるわけで、これも貴重な体験だと思いますね。

篠原●いろいろなやり方があるということを知ることも建築主にとって大事だと思いますね。

宮崎●感性を訓練することは建築主にとって非常に有益ですよ。価値観が成長していくことによってその人の生活自体の幅が広がることになるわけです。

建築家に頼むメリットとは?

連●建築家に依頼するメリットには、建築主側に立つて工務店と交渉してくれるということも大きいと思います。うまくいっていれば問題はないのですが、何かトラブルが発生した時の建築家の役割というのはすごく大きいと思いますよ。

田口●建築主にすれば、建築家の役割が充分に分からなくて、何をどう伝えればいいのかが分からないということもあるでしょうね。

畠●それに建築主にしたら、やはり設計料のことが気になりますね。

今井●いいものをできるだけ安く建てるというのは誰にとっても理想ですよね。企業だから仕方がないという面もありますが、工務店には、どうしても営利を追求しようという考えがあります。だからコストを僕たちが適正かどうかチェックするわけです。

連●工務店は建物をしっかり施工するのが仕事ですが、必ずしもそういうように考えている工務店ばかりではないですね。

赤沼●建築家の仕事の第一原則は、建築主の利益を守るということですが、その中には、守秘義務ということも大きな要素になります。業務的には、1.設計図を書く、2.設計図通りにできているかどうかという監理、そして 3.予算管理という3つの柱を持っています。当然、工務店の内容や技術についても判断しますね。

宮崎●プロセスがあるのだということですね。オートクチュールで洋服を作ることと似ていると思います。

畠●建築主には遠慮しないで何でもいいってもらいたいですね。予算的には無理をされないことが重要なのですが、やはり構えてしまわれる方もいらっしゃいます。スタンスをもっとオープンにされたらいいのにと思いますね。

篠原●予算が十分にあるケースなんてまずないですから、夢を一杯語ってもらって、実際には、設計していく段階で削っていかざるを得ないということもありますね。

今井●確かに予算のことで建築主が委縮してしまうこともありますね。そこで、僕は、最初に要望に優先度を付けてもらうことにしているのです。そうすれば予算に合わせて調整していく時に、どれを生かすか、これだけは何とか実現してあげないとということが可能になります。そして、最終的にどこかで帳尻を合わせるわけです。

連●建築家に頼むことは、結局、得だと思いますよ。きちんとコストコントロールをしていくと、一般的な住宅の規模でもコストが300万~400万円程度違つたりするわけですから、設計料の分など出てしまう計算になります。それに予算をオープンにしていくということは、建築主が限られた予算の中で的確に判断をする上で非常に大切なことだと思います。

田口●建築主にとっては工務店を選んでもらえるということも大きいことだと思います。過去の経験からこの見積金額は妥当だとか、ここなら大丈夫だと判断するわけですが、ほとんどの建築主は、初めての経験なので判断をすることは難しいと思います。

連●僕は建築家に頼むということは、保険に入るみたいなものだと思ってもらったらどうかと考えています。設計段階もそうですが、竣工後のファミリードクター的な役割も大きいと思います。建てっぱなしでなく、将来にわたってメンテナンスや増改築の相談ができるわけです。

畠●もし僕が建築家でなかったとすれば、自分が家を建てる時は、絶対に建築家に頼むだろうと思います。実際、建築主に一つずつ納得してもらしながら調整をしていくですから、建築主にとっての満足度は高くなりますよね。家具にしてもこの空間に合うのはこんなイメージの家具だと説明してもらえるわけですから、空間としての統一性といった面でも質の高いものが出来ることになります。

連●一級建築士と建築家というのは、技術やスキルといった面では差が無くてもコンセプトや考えといった面で哲学を持っているかどうかという点で変わってくると思います。技術を売り物にしているだけでは建築家とはいえないですね。だから公共建築の場合だと建築家をコンペで決めていいと思いますが、住宅の場合にはやはり実際に会って、話をした上で建築家を選ばるべきだと思いますね。

今井●それに住宅の場合は、建築主が入居することによって、さらに成長していくと思うのです。そこで、僕は打ちあわせ段階では建築主と意見が食い違うことがあれば、議論もしますが、竣工して入居される段階では、たとえ言いたいことがあっても、建築主との議

論というか争論はしないようにしています。誰だってそういう記憶を引きずっていては気持ちよく住めないと思うのですよ。

畠●やはり住宅というのは、人が最後に戻れる拠点だと思うのです。本当に自由でいられる場所なわけです。一つの住宅というのはその人の世界といいますか、個人の文化をつくりだしていく場所でもあるわけで、

フィジカルな面だけでなく、住み手の歴史的な関係や人間のつきあいの中で設計していくという意味では、住宅の設計というのはとても文化的な営為だと思います。

CW●今日はお忙しい中、どうもありがとうございました。通り一遍の家づくりについてのアドバイスではなくて、建築家の皆さんのがこれまでの経験の中からの言葉だけに大いに参考になると思います。読者の皆さんもこれを読みいただいて、自分たちにびったり合った建築家を見つけていただければと思います。◆



有連健夫建築研究室
連 武夫氏 (P.138)

D's LABO AOYAMA(ディーズラボ青山)

座談会の会場は、都内で皆さんのが集まりやすい場所ということで、大光電機㈱さんが本年3月に東京・青山に「あかり」の最新情報の受発信拠点としてオープンされたばかりD's LABO AOYAMA(ディーズラボ青山)のサロンをお借りいたしました。ありがとうございました。



東京都渋谷区神宮前5-42-13
タキビル青山 TEL 03-5467-2531 FAX.03-5467-2561

*1 <http://www.mitsuihome.co.jp/FLWRIGHT/MUSEUM/LIBRARY/CATALOG/kaufmann.htm>
*2 <http://www5a.biglobe.ne.jp/~obw/study/house/ikebe/ikebe.html>



プロフィール

1956年 京都府生まれ
1979年 多摩美術大学卒業
1982年 東京都立大学大学院修了
1982年 株式会社鉄工所設計部
1991年 渡英 AAスクール留学
1993年 AA大学優等学位取得
1993年 同校助手
1994年 東ロンドン大学講師兼務
1995年 在英日本大使館嘱託勤務
1996年 帰国、連健夫建築研究室
2001年 明治大学兼任講師

連 健夫

むらじ たけお

得意な工法

- ・在来木造
- ・混構造
- ・コンクリート打ち放し造
- 得意な分野**
- ・戸建て住宅、集合住宅、住宅地計画、まちづくり、福祉施設、幼稚園、学校、大学キャンパス。心と対話する建築を目指して、コラージュ(切り貼り絵)やワークショップなど創造的なプロセスを大切にした設計を行っています。
- 設計を引き受けける条件**
- 建築に対する考え方を共有していただける方。コミュニケーションを含め、設計のプロセスを大切に考えていただける方。
- 住まいについての考え方**
- 耐久性、健康への配慮、バリアフリーはもちろん、癒され元気になる家を作りたいと思っています。このため自然素材を活かすと共に、住み手の思い出やこだわりなどをデザインに反映させたいと思っています。

①プレゲンス邸・長野県 自然豊かな環境の中でのんびり過ごす2階建ての週末住居。自然との一体感が大切にされている。屋根からの曲線垂木は落水のイメージからきている(木造)

②ヌードルハウス尾張屋・京都市 1階がうどん、そば店の4階建て店舗付住宅、京都西陣のまちなみみに配慮し、蔵、お城、竹林をモチーフとしている(RC壁式構造)

③すっぴんの家/M邸・神奈川県川崎市 日本の民家のエレメントである木の格子、縁側、土間等を活かした木造2階建ての住宅。家族のコラージュからデザインのヒントを得た(木造)

ローコスト(2,000万円以下)に対する考え方

素材の特性を活かし、無駄がなくバランスの良い設計を行うこと、これが結果として美しくて、気持ちの良い建築空間になるとを考えています。

リフォーム(マンションを含む)について

現在あるものの良さをできるだけ活かす中で、魅力的な空間を生み出すことが大切と考えています。これが歴史や思い出の継承に繋がると考えています。

将来の建築主へのアドバイス

電話、ファックス、メール、何でも、ご遠慮無くお声をかけてください。敷地選定、資金繰り、進め方、工務店選び、大小を問わず、様々な相談に応じています。

代表作品

- 1997年 「プレゲンス邸」(長野県)
1998年 「ヌードルハウス尾張屋」(京都市)
1999年 「ツリーハウス/S邸」
(東京都世田谷区)
1999年 「ノアの方舟/I邸」(東京都三鷹市)
2001年 「スキップフロアの家/S邸」
(千葉県佐倉市)
2001年 「すっぴんの家/M邸」
(神奈川県川崎市)
2002年 「見通しの家/I邸」(東京都青梅市)
2003年 「ルーフデッキのある家/A邸」
(神奈川県川崎市)



1



2



3



4

リフォーム例



-139-

(有)連健夫建築研究室・一級建築士事務所

東京都渋谷区桜丘町12-8

渋谷コーポラス209 TEL 03-5456-5134

FAX 03-5456-5160

takeo-mu@mx1.nisiq.net

<http://www.geocities.co.jp/Hollywood/8372>

業務時間／9:30～19:00

休日／土曜、日曜、祝日(必要であれば調整可)

主な仕事内容／建築設計・監理、

まちづくりワークショップ、コンサルタント

